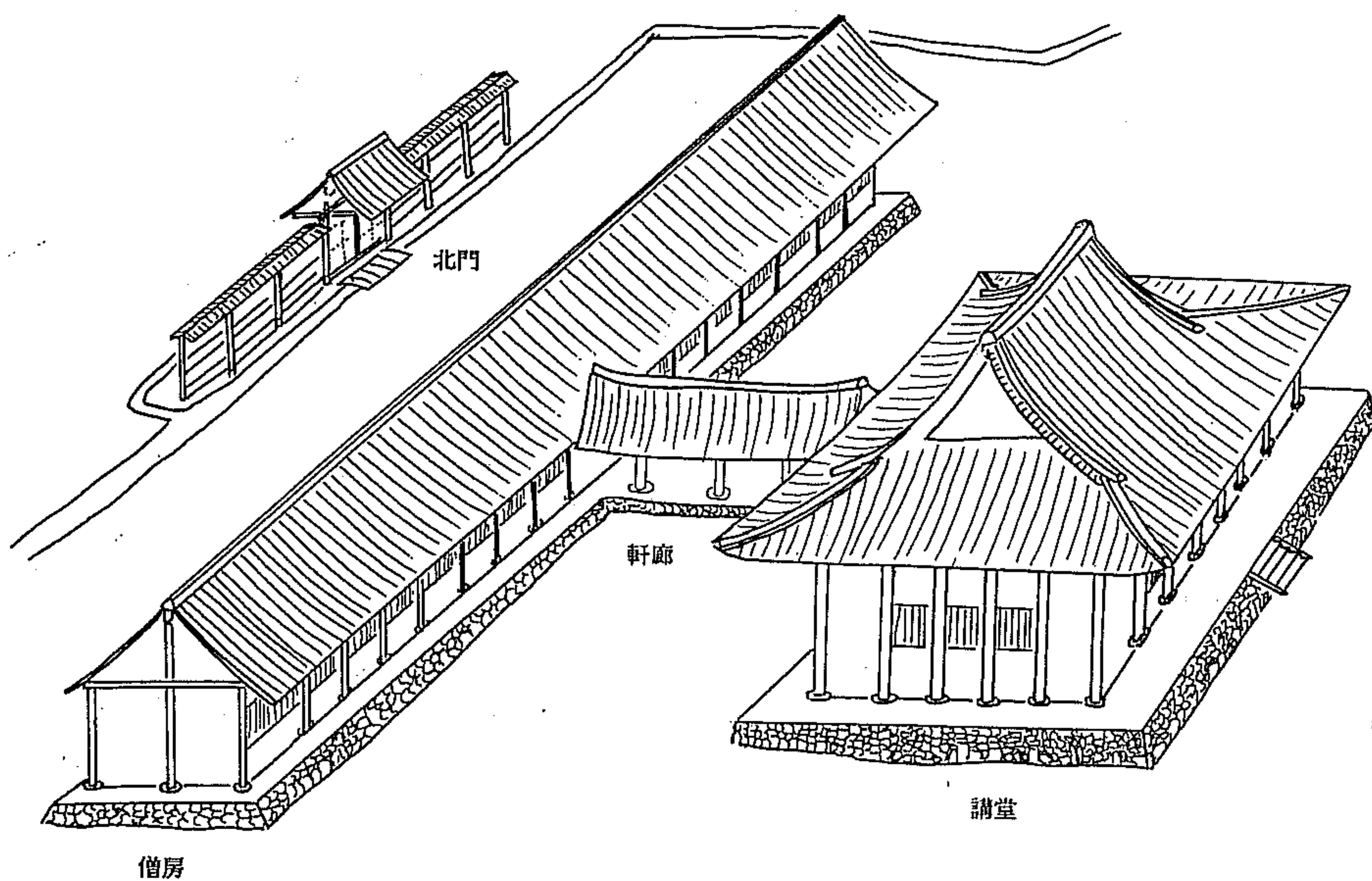


1999年12月19日(日)

東広島市西条町大字吉行

史跡安芸国分寺跡発掘調査遺跡見学会資料



財団法人東広島市教育文化振興事業団
東広島市教育委員会

I はじめに

安芸国分寺は、奈良時代、聖武天皇の命によって全国 60 余カ国に造られた国分寺の一つで、「国華」と呼ばれていたように、地方文化の粹を集めた寺院でした。そのため、この時代を代表する遺跡として国の史跡に指定されています。

東広島市及び東広島市教育委員会では、この史跡を永久に保存継承するとともに公開活用する目的で指定地の公有化を進めるとともに、創建当時の伽藍の様子を探る目的で発掘調査を進めてきました。

このたび、現、国分寺の北側、約 500 m²の範囲を調査し、講堂跡及び僧房跡、そして講堂と僧房を結ぶ軒廊（こんろう）と呼ばれる渡り廊下の跡を確認するという成果を得ることができました。

II 調査の概要

講堂跡は、広島県教育委員会が 1970 年に行った調査によって講堂跡北辺の基壇の内、西半部の積石が確認されていました。

このたびの調査は、残る東半部の基壇の状況と周辺の遺構との関連を調べるために行なわれました。その結果、講堂跡は予想以上に保存状態が良く、規模も、東西 30m を測る大規模なものであることが明らかになりました。

さらに、講堂跡の北側中央部分から基壇状の高まりが北に延びているのが見付き、その北方で再び東西方向の基壇を確認しました。

講堂から北に延びる基壇は講堂と僧房を結ぶ軒廊であり、その北にある基壇は結果的に僧房のものであることが確実となりました。

III 遺構と遺物

遺構

講堂跡 第1調査区で北辺が、第2調査区で東辺が確認されました。

北辺では、2 段から 3 段の積石がほぼ全面にわたって積まれ、乱石積みの基壇となっています。石の大きさは 20～30cm で、最下段の石は立てられ、その上には横長に石が積まれた状態が窺われます。

基壇は、石を積みながら土を盛っていった様子が窺われ、現状より 20～30cm 高かったようです。

講堂跡の規模は、東西約 30m、南北は明らかではありませんが、17m 以上はあったようです。また、東寄りで 2 個の礎石が残存し、西端で礎石の抜取り穴を確認しています。

北辺中央部で軒廊と接していますが、接合部分には講堂廃絶時のものと思われるゴミ穴が掘り込まれており、どのように講堂と軒廊がつながっていたのか明らかにできません。

なお、講堂の廃絶時期は、ゴミ穴の遺物から平安時代後期のことと考えられます。

僧房跡 講堂跡の北側約 8m の場所で基壇状の高まりが見つかり、僧房跡と確認されました。

規模については明らかではありませんが、僧房跡南辺から約 12m 北側には寺域の北側を区画する溝や北門跡があることから、それよりも南側に位置する細長い建物と推測されます。

また、軒廊を挟んで東側には僧房基壇石の抜取り痕が見られるのに対し、西側では 40～50cm にわたって瓦を敷き詰めた部分が見られ、あるいは、僧房の東側と西側では建物の構造や建てられた時期が違うことも考えられます。

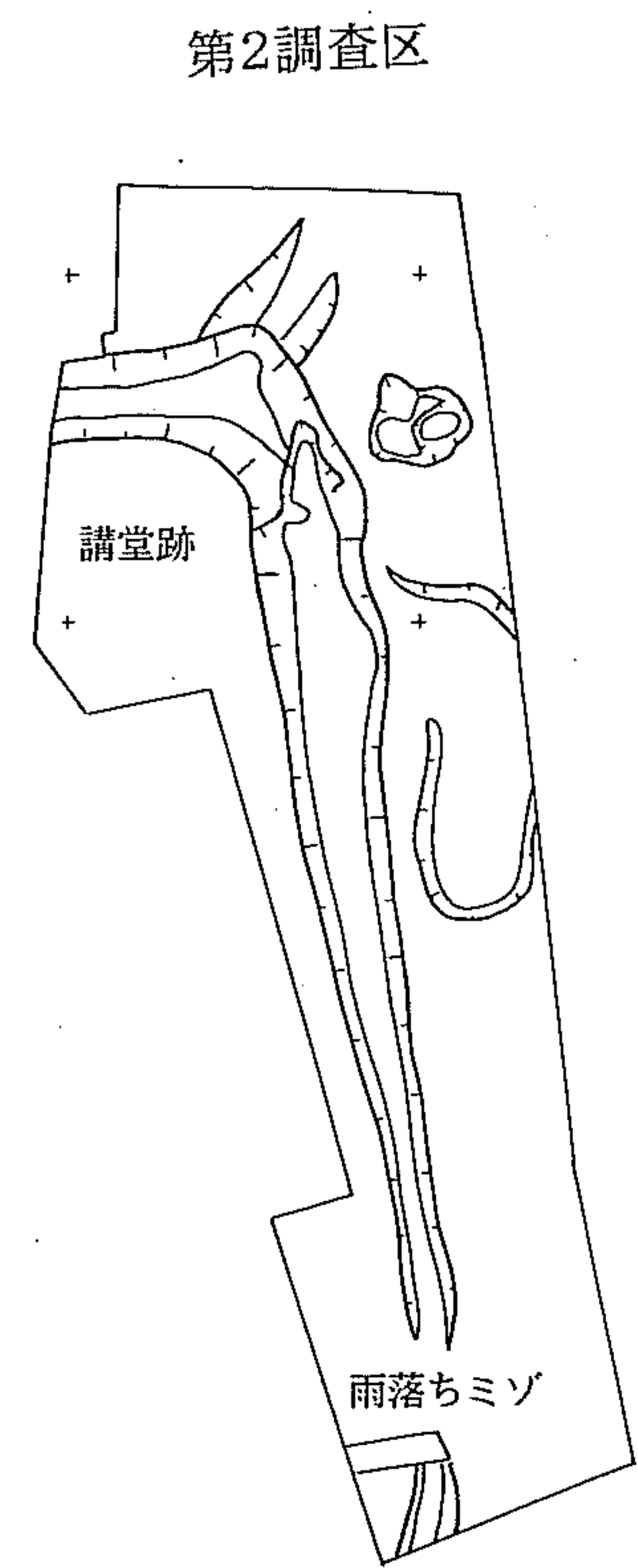
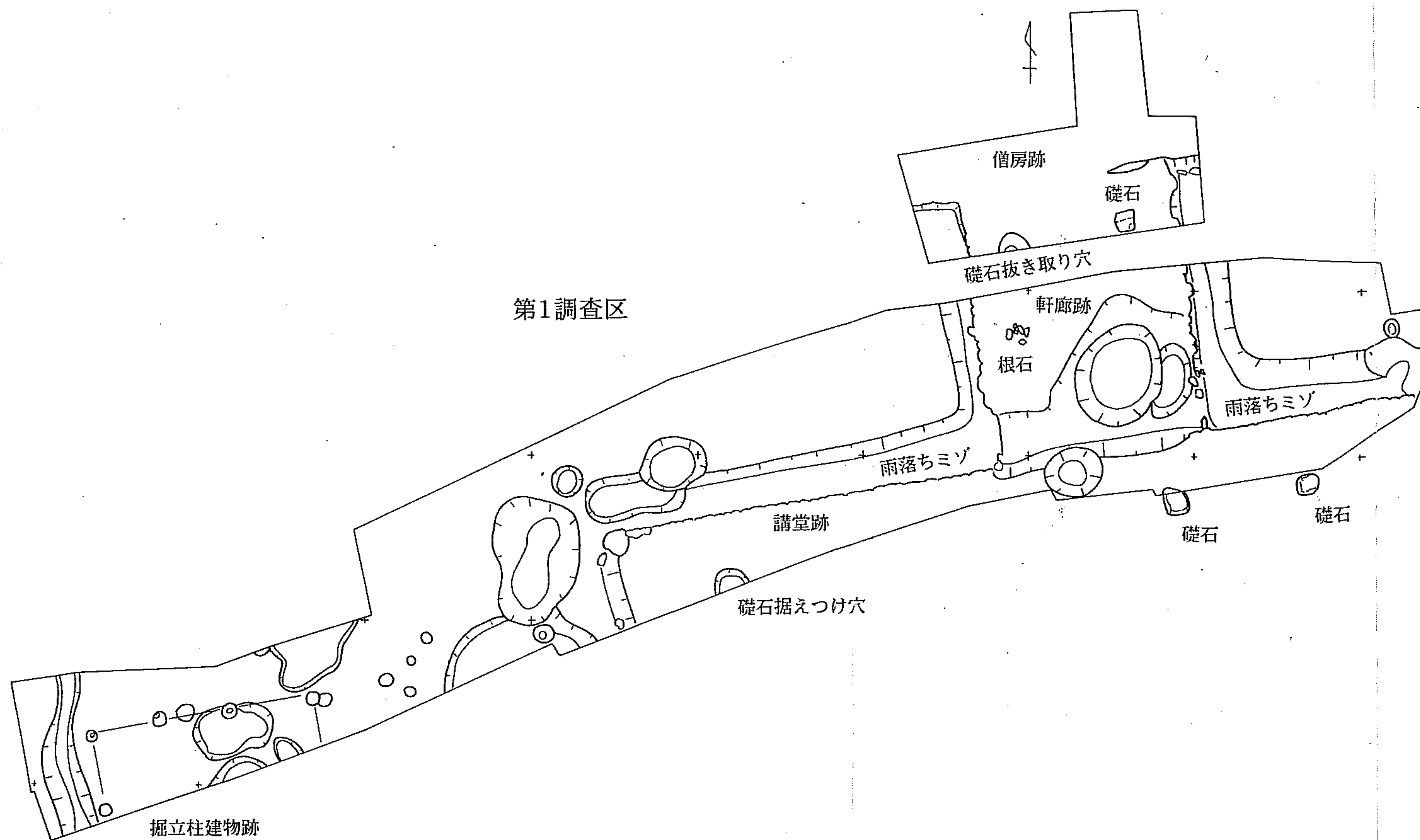
軒廊跡（こんろうあと） 講堂跡北辺の中央部から僧房跡に延びる渡り廊下の跡です。

東西約 6.5m、南北約 8m の規模で、両側面を石列で区画しています。内部は盛土によって周囲よりも 20～30cm ほど高くなっています。

軒廊の北東側で約 50cm 四方の礎石 1 個を確認し、北西で礎石抜取り穴、その南で礎石を据えた根石を検出しました。柱間は、東西が約 3.9m 南北が約 2.4m あります。これらのことから、本来片側に柱が 3 本ずつある 1 間×2 間の礎石建ち、瓦葺きの軒廊だったものと考えられます。

礎石を据えるために掘られた穴がないことから盛土をしながら礎石を据えていったものと考えられます。

掘立柱建物跡 第 1 調査区の西端で確認されました。講堂跡の西約 10m に位置し、東西 2 間、南北 1 間分を確認しました。柱穴の位置から南北方向に長い建物だったと推定



調査区遺構配置図(1:150)

されます。

建物の向きが講堂跡と揃うことから、講堂と同時代に存在したものと考えられますが、柱穴の掘り込まれた層などから、講堂の創建当初からあったものではなく、最終段階に近い時期のものと思われます。

土壌群 第1調査区、講堂跡の北側に掘り込まれた複数の土壌です。出土遺物からそのほとんどは、講堂の廃絶に伴って出たゴミなどを廃棄したゴミ穴だったと考えられます。

遺物

遺物は、ほとんどが瓦の破片で、土器は、須恵器・土師器を中心に若干量が出土しています。

瓦は、講堂跡と僧房跡に挟まれた部分から最も多く出土していますが、完全な形のものはありません、軒瓦もほとんど見られないことから、使える瓦はどこかに持ち去られ、屋根から下ろす際に割れた瓦だけが廃棄されてその場に残されたものと考えられます。

土器は、台のついた小皿状のものが多く出土しています。これは、小さな碗とセットになって六器（ろっき）と呼ばれる密教法具として使用されたものと思われます。

瓦、土器以外では、金属製品、石製品があります。

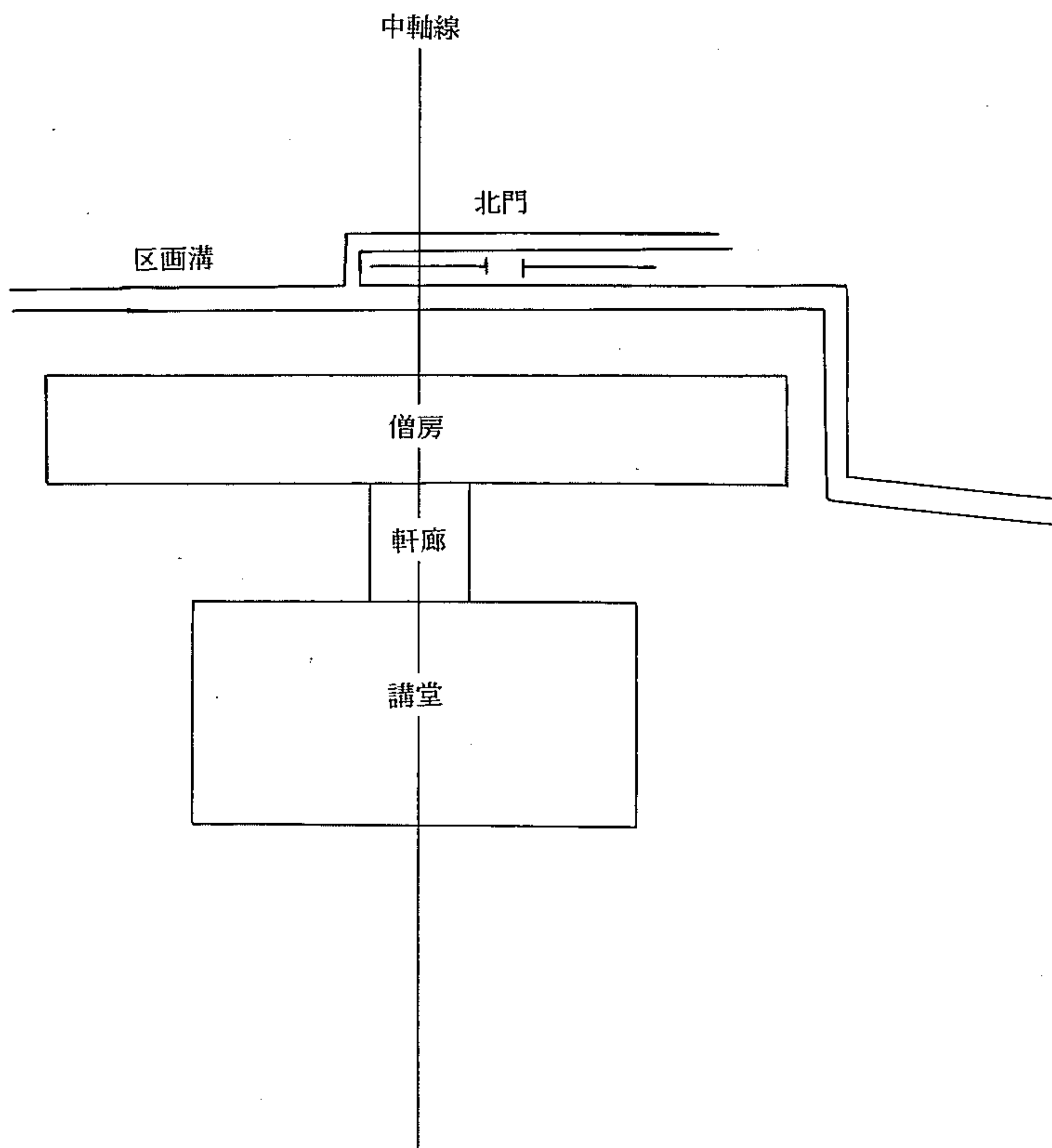
金属製品は銅鏡と鉄釘で、銅鏡は小片ですが、海獣葡萄鏡と呼ばれる鏡で、推定直径は12cm。製作地は中国の唐です。製作時期は7世紀末と見られます。非常に精巧な造りで、同じ模様の鏡は、国内はおろか、中国でもまだ発見されていません。

石製品は、花崗岩に半円状の穴を掘り込んだもので、性格は不明ですが、石櫃の可能性が考えられます。

IV まとめ

このたびの調査によって、講堂、軒廊、僧房という国分寺の伽藍中枢部の北側の様子が明らかになりました。

講堂跡は、従来西側に雨落ちミゾがないことから、切妻造りの建物とされていました



講堂付近建物配置想定図(1:500)

が、実際は、浅い雨落ちミゾが基壇の周囲をめぐっており、他の寺院と同様に入母屋造りの大規模なものであると考えられるようになりました。

僧房跡は、従来、その存在すら知られていなかった施設ですが、軒廊によって講堂跡と結ばれていることから僧房跡であることが明らかになりました。

軒廊跡は、奈良の大寺院ではよく見られますが、国分寺では現在までに陸奥国分寺跡、上総国分尼寺跡、紀伊国分寺跡で見つかっているだけです。いずれも小規模なもので、安芸国分寺跡のものはこれまで見つかったものの中で最大のものです。軒廊は、金堂や講堂と違って無くてはならないものではありませんから、そのような施設を立派に造るということからすれば確認されていない主要伽藍についても立派なものであったことが推測されます。

また、講堂跡、軒廊跡、僧房跡が並んだことによって、伽藍の中軸線が軒廊の真ん中を通ることが確認されました。このことによって昨年度調査された金堂跡についてもほぼ推定地付近に存在していたことがほぼ確実となりました。

なお、前回調査された北側の区画溝と北門跡については、北門が中軸からは外れていること、北側の区画溝は、寺域の北を限るとともに僧房を囲むように僧房跡の東で南に折れ曲がるものであることが考えられます。

今回の調査では、以上のように多くの成果を得ることができましたが、それによって寺院全体の伽藍配置を考えていくことが今後の課題となるでしょう。



参考 海獸葡萄鏡(高松塚古墳出土)